

象徴遊びと言語の発達 - 自閉症スペクトラム幼児の事例から -

立命館大学大学院応用人間科学研究科
対人援助学領域 発達・福祉臨床クラスター
猪口 綾

本研究は、自閉症スペクトラム（ASD）幼児の象徴遊びと言語の発達について論じたものである。対象児は、ASD と診断された男児で、週に 1 回 90 分間のプレイセラピーを受けている。本児の生後 40 か月から 46 か月までの 7 か月間の観察記録をもとに遊びと言語の発達過程を分析したものである。プレイセラピー場面で観察された遊びは、McCune-Nicolich(1981)による象徴遊びの水準をもとに分類された。対象児はこの時期、レベル 4 とレベル 5 の象徴遊びの水準を示した。また、分析から、象徴遊びは初めセラピスト主導でおこなわれ、それから子どもが自発的に発展し始めることが示された。象徴遊びと言語の発達との関係については、レベル 4 の段階では 1 語発話が多くみられ、レベル 5 の段階では 2 語発話が多くみられた。自閉症スペクトラム児は象徴機能の発達に困難を示すとされているが、本研究の結果から自閉症スペクトラム児がセラピストの指導のもと象徴遊びを発達させる可能性と、象徴遊びが自発的に展開されるなかで言語が発達する可能性が示唆された。